慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	モーリス・ジンキン アジアと西洋
Sub Title	Zinkin, Maurice; Asia and the West. London, 1951, pp. 800
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.4 (1952. 4) ,p.288(68)- 293(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19520401-0068
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520401-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九二〇年（一、五八〇、九六七）
一九二五年（一、八四六、〇四七）
一九三六年（四、三一四、七四〇）

だがフランス資本主義といわず資本主義一般がもはや如何ともし難い危機に直面しつつあることを示したものは、一九二九年以來の世界恐慌であつた。資本主義が今やその衰退期にあることを身を以て感じたものはひとりマルクス主義者のみではない。ロシヤ革命の着實な發展とファシズムのかつてない猛威はフランスの資本家階級にとつて〝二つの悪魔〟となつた。ファシズムのたたかいに脆くも敗れたフランスは、資本家的な利害のためにその傳統ある自由を捨ててナチと妥協したことがいかにフランス人民の名譽を傷つけたかは今更いうまでもない。ナチに屈從してからのフランス人民の生活は極度におしさげられ、生活費は賃金をこえるに至り勞働條件は益々悪化していつた。一九四四年をもつてフランス勞働史の筆をおくに當り、クチンスキーは最後に〝願わくはこの悲しい數年の後、フランスの人民が苦しみから解放されてより多くの自由を、そしてより多くの繁榮と幸福とを受けんことを〟と祈つている。

だがヒットラーが死んで七年、ようやくファシズムから解放されたはずのフランスが再軍備に狂奔する〝自由諸國〟の一員として、果して今、より多くの自由と繁榮とそして幸福とを得ているであろうか。

一九五二、二、二〇

モーリス・ジンキン
『アジアと西洋』

Zinkin, Maurice; Asia and the West. London, 1951, pp. 300.

矢内原　勝

「今世紀の歴史を概觀する時、最近十年間の主要な事件はヨーロッパに起つた戰爭でも變化でもなく、アジアにおける出來事である樣に思われる。」本書の著者、ジンキンが自ら序文の冒頭に述べているように、アジアは今や、アジア人ばかりでなく、西洋人にとつても國際政治上のキイ・ポイントとして浮び上つて來ている。かつて Indian Civil Service の一員であり、今なおインドで働きつつあるジンキンの眼は、したがつてインドにより多く注がれているとは云いながら、東南アジア各地域に亙り、西洋との接觸によりこれらの地域がいかに變化して來たか、そうしていかに變化して行くか、又變化させて行かなければならないかが、一英國人の立場から直截に、興味深く綴られている。

*　*　*

本書の特色の第一はその構成にあろう。「インド」、「インドの豫測」、「ビルマ」、「シナ」、「ジャバ」、「滿洲」、「マレイ」、「フィリッピン群島」、「タイ」、「日本」の各地域が獨立の章として取扱われながら、その間に、「東洋の村落と西洋の都市」、「アジアの農民世界」、「生活水準」、「崩壞」、「革命」、「帝國主義」、「複合社會」、「宗教」、「新アジア」、「資本と技術」、「國家の役割」、「不足條件」、「防衛」の諸問題が章別に解明されている。これらの章と、附錄の「アジア貿易」、「アジアとドル」、更に序文とあと書は、アジア地域一般に共通な各特殊テーマであり、それらを地域別の記述と密接な關係を保ちながら展開させてゆく著書の腕前は見事である。しかしここでは各章を始めから順序に從つて忠實に追うことを止めて、著書の見解の裡からとくに興味ある若干の點を摘出して論じることにする。

一

西洋文明が都市に生れたのに反し、東洋の社會的基盤は村落である。アジアはもともと農業社會であり、小土地經營と劣悪な技術は、その低生産性を餘儀なくさせながらも、自給自足的經濟社會を形成し、停滯的ではあるが一應人口と生産力の間にバランスのとれた、その意味では幸福な農民社會であつたといえる。西洋との接觸は必然的にこの社會を根柢から搖り動かした。(P. 34) これによりアジアの農業社會は最近數十年間にその停滯性を破られ、動態的にはなつたが、それは生活水準の高度化をもたらさず、かえつて貧困化は益々その度を加えたのである。貧困化の第一の原因は過剰人口問題である。西洋の知識はアジアの飢餓と疫病を減少させ、かつての東洋社會の人口增加に對するマルサス的チェックを除去した。資本主義發生期における巨大な人口增加に對して、西洋では移民を吸收すべき新大陸と農村過剰人口を吸收すべき工業が存在した。しかるに今日のアジアにおいては既に餘分の土地はなく、日本を除いては工場もまだ殆んど建設されていない。西洋流の私有財産制度の移植は地主と金貸業者の地位を有利にした。貨幣經濟と市場生産の導入は農民の負債を增加し、農民は自作より小作へ、小作より勞働者へと轉落していつた。しかも土地なき民に仕事を與えるべき工業は未だ發展していないのである。

東洋貧困化の第二の原因は西洋によつて加えられた衝擊である。それは二つの形態において古い農民社會の安定を破壞した。卽ち、西洋社會の富は、東洋に對してその低い生活水準は神の意志の結果ではなくて、自らの技術の非能率性によるものであることを示した。第二の形態は西洋が東洋に生産の新方法ばかりでなく、思考の新樣式を導入したことである。自由、進歩、平等、變革というような思想は東洋人の精神生活を攪亂するに十分な要素だつたのである。

このようにして東洋社會は崩壞に瀕している。その直接的表現は生活水準の低下に外ならない。これを救う唯一の道は、著者によれば西洋化の推進である。例えば、日本の反當收量が他

のアジア諸地域と比較して著しく多い原因は、他の地域が依然として古い農業方法を續けているのに對して、日本は西洋科學による衝擊により變革した農業方法をとつているからである。(P. 30) そして又、次のようなことも論じている。即ち、資本と創意の不足がアジアの道具を原始的なものに止まらせた。このような道具を以てしては耕作面積は一家族によつて經營される面積に嚴密に制限される、と。(P. 18) しかし我々が何故日本農業に資本家的大經營が行われないかを考察する時、著者の見解とは逆に、經營規模が小さい故に機械が導入されないことを見出す。傳統的な東洋農業社會に對する單なる西歐的資本と技術の導入だけでは、東洋社會を崩壞から救うことができないことを指摘しなければならないであらう。

二

著者によれば、帝國主義的搾取には大別して三つの意味がある。(P. 60) 第一に、アジア人は、自己の文明は資本と創意と社會秩序において一時的不利を蒙つている、從つて西洋の主張する自由競爭は公正であることはできないと感じている。アジア人にとつての最悪の搾取は、その社會を、崩れた堤防を以て西洋化の押しよせてくる潮に直面させることになる自由放任(レッセ・フェール)から歸結する。第二に、西洋の東洋に對する進出によつて、全社會がその資源を最大限に利用することになるのは、全社會の利益であり、このケーキの大きさの增大が利益であることについては問題ない。問題はその分前たる一片の大きさにある。新しい富が一階級、或いは一國のみに歸屬する時は、他の階級、他の諸國は、絶對的にはより貧困にならなくても相對的にはそう感じる。ケーキそのものが大きくなつて、しかも同時に原住民の分前の一片がより小さくなつた場合、問題はなお一層悪い。第三に帝國主義的搾取は古い文明のバランスの破壞を意味する。西洋の資本と技術の進出に遭つて、誕生すべく鬪爭しつつある新アジア企業に對して、日本を除いてはいかなる保護も援助もなされなかつたのである。

このような帝國主義的搾取の解明には、更に不等價交換問題のような理論的分析が附加されなければならないと思う。しかしそれはともかくとして、以下の著者の見解は極めて獨自のものである。

アジアに對する西洋の衝擊は壓倒的な物質的優勢であつた。しかしその背後には西洋の政治的且つ科學的傳統、更には精神的潮流が存在するのである。十九世紀に西洋が東洋にもたらした二つの偉大な信仰、自由と繼續的な物質的進歩の可能性に對する信仰は二つの態度を伴つた。第一は東洋をより高い生活に迄引上げようと望んでやまぬ宣教師の態度であり、第二は自分の利益となることは社會の損失になる筈はないという假定の上に資源を搾取しようと切望する實業家の態度である。(P. 135)

宣教師の態度についてはインドにおけるイギリスが最良の例であり、(P. 138) 實業家の態度については滿洲における日本が最良の例である。インドでは西洋精神がうまく理解されキャッチされた。日本は西洋の精神的自由は故意に之を拒否し、物質的技術のみを引き繼いだ。(P. 94) したがつてその日本が帝國主義國として臺灣、朝鮮、或いは滿洲に立ち現われた時、最も苛酷な帝國主義的搾取が行なわれた。ケーキは大きくなつた。しかし原住人の分前の一片はかえつて小さくなつた。我々は滿洲において、實業家が宣教師によつて完全に妨げられなければ何をなし得るかをみることができる。(P. 138) 之に反してイギリスはインドに西洋自由文明の本質的概念を移植することに成功した。西洋の諸物、機關車、紡績工場、大砲は日本人を侵略者にしたが、西洋精神はインド人の中から自由な人間と民主主義者を作つた。六〇年の物質的計畫は日本に東條をもたらし、一〇〇年のイギリスの教育はインドにネールを生んだのである。しかしそれならば何故ガンジーやネールは反英的態度を示すのであろうか、著者はこの點については一言も觸れていない。日本が明治維新以來、西洋より物質面の模倣、攝取に努め、精神面のそれを無視したという著者の指摘は正しい。そしてこの西洋文明の精神的基盤の無理解が日本を軍國主義的侵略者とし、遂に太平洋戰爭を起して日本自らの死に至らしめたという指摘も妥當であろう。しかし日本の帝國主義的政策と英國の帝國主義的政策の差は本質的なものなのか、程度の問題なのであるのか。なるほど帝國主義下の朝鮮人は帝國主義下のインド人よりも搾取されたであろう。しかしそれが著者のいうような、日本帝國主義においては自由主義、民主主義思想に牽制されなかつたために資本家の利潤追求欲が赤裸々に現われたのだということで十分に解明されたのであろうか。植民本國としての日英兩國の經濟構造の分析によつて、より正確な解答が得られるのではなかろうか。

三

新アジアにおいて最も重要な國はインドとシナである。(P. 265) 兩者は共に民族革命の產物でありながら、しかも全く異なる組織と哲學をもつ。インドは自由主義を、シナは共產主義を選擇した。しかも兩者にとつての最高の課題は共通であり、その恐しい貧困をいかにして終らせるか、少くとも減少させるかということである。(P. 205) 兩國のインテリゲンツィアは、この貧困が近代技術の知識によつて克服され得ると信じるようになつている。インドは自由主義制度がその生活水準向上の手段として最も効果的であるとして之を採り、シナは自由主義制度の下では生活水準を向上させるのは社會の一部分のみに止まり、共產主義下ではじめて全社會の貧困が救出されると信じるが故にこの制度を採つたのである。(P. 205) そしてアジアの

爾餘の國々は、どちらの制度が事實上、最も急速に富、力、特權を築きあげ得るかを見守るであろう。この競爭においてどちらか勝利者となつた國を恐らく模倣するであろう。もしシナが成功しそうだということになればインド迄、自分の自由主義を棄てて共産主義に行くかもしれない。アジア人は土地改革と、少くとも生活水準向上の希望を與えることをしない、いかなる政府も支持しないだろうということを示している。(P. 284) それ故、もし西洋、即ちブリティッシュ・コモンウェルスとアメリカ合衆國が共産主義の潮を防いで自由を獲得しようと欲するならば、インドがシナよりも、その他のアジア諸國の模倣のためにより成功したモデルを提供するようにさせなければならない。インドでは既に地主と金貸業者は破壞された。近代インドは自由主義國家として創造された。今之を保持している階級は比較的小さな西洋化された中流階級の上層部である。人民の大部分は右にも左にも偏見を抱いていない。彼らの中、ある者は貧困と挫折の中から革命的傾向を示している。しかし彼らを唯一つの事によつて、即ち經濟的繁榮によつて自由主義國家を支持する側に獲得できるであろう。(P. 207) 經濟的繁榮をもたらすためにインドは外國より資本と技術を必要とする。西洋にとつてそれは費用がかかるであろう。インドのみのために二億ポンドもかかるかもしれない。その他の諸國も分前を欲することは疑いない。しかしいかに費用がかかつても自由且つ民主的な

國家において幻滅――自由と民主主義の高い希望におけると同樣に選擧民と政治家を幻滅させる生活水準の漸次的下降は防がれなければならない。アジア人の自尊心を失わせないようにして、西歐の資本と自由企業が與えられなければならない。その最良の方法の一は南アジアのためのコモンウェルス六カ年計畫(コロンボ・プラン)の背後にアメリカのドルを注入すること。もう一つの方法はアメリカ政府よりアジア諸政府への直接の貸付である。東洋に民主主義を建設するための西洋資本の使用におけるキイとなる國はインドと、より小規模にはパキスタンである。それにも拘らずアメリカは日本、朝鮮、蔣介石に金を費つて、フイリッピンを除き、殆んど完全に南アジアをネグレクトした。それは政治的と同樣、經濟的過失であつた。(P. 256) 日本は現在ではアメリカの同盟者であるけれどもこの地位は疑わしい。もしアメリカの强制が外れてその同盟者を自由に選べるようになれば、日本は西洋に對する東洋の決勝試合を試みるかもしれない。(P. 256) アメリカの同盟者としては、平時においては勿論、戰時においてさえ、アジアにおいてアメリカに對するその有用性は疑わしい。アジアの爾餘のものは日本を指導者として仰がないであろう。

このように著者はアメリカが日本に金を費うのをやめて、インドに對して一層、ドル援助することを要請しているのであるが、現實の動きは彼の希望とは反對に、特に桑港の講和條約以來、日本は戰時におけるアメリカの有用な同盟者の地位に立たされるようになつて來ているのである。

＊　＊　＊

以上述べてきた若干の問題點からも窺われるように、この書に語られている樣々な事柄は我々に多くの示唆を與える。しかし我々はこれより一歩前進しなければならない。そのために、一方では理論的分析を一層深め、他方においてこれを現實の國際情勢の動きと對照させてゆくことが必要である。そうすれば我々はアジアについてより明確な把握をなし得るであろう。

(一九五一年十二月)

ロバート・バートルズ『配給論は科學たりうるか』

Robert Bartles; Can Marketing be a Science?
The Journal of Marketing. Vol. XV No. 3, 1951
pp. 319―328

片岡一郎

アメリカにおける配給論の研究は、歴史的には先づ配給問題の職能的理解として誕生し、職能分析と商品分析が初期の配給論の研究を特色づけていた。ヴァンダブルの言う如く、アメリカにおける配給問題に關する理論的研究の嚆矢であつたショウの「配給の若干問題」は、嚴密には配給職能 (Marketing functions) に關する研究と言うよりは、むしろ仲介人職能 (Middlemen's functions) の研究とみるべきであるかもしれないが、ショウの論説に刺戟されてその後に現われた L.D. H. Weld の如きはその研究の主題を配給職能においたことは彼の論説 (Marketing Functions and Mercantile Organization (American Economic Review Vol. VII 1917. pp. 306～318) に明らかである。その後此の方面からの研究が行詰るや、やがて制度分析が强調せられ、配給機關に關する統計的實證的研究が促進せられ、配給經營論としての展開の基礎が與えられた。爾來配給論は配給經營論として展開し來つたのであるが、近來配給のもつ社會的意義が指摘せられ配給が商人の競爭的營利活動のための舞臺としてより以上の意義をもつに及んで、科學としての配給論の確立が要望せられるに至つた。即ち今日迄の配給論は、多く個別的な私的企業の問題を對象として來たのであつたが、今日配給がもつ意義はしかく簡單ではなく、一層廣汎な社會的意義を有するものである。その限りにおいて、「古い原理はもはや新たな社會事情の下では十分その案内の役を果す」ことは不可能である。從つて配給論が今日の配給問題の解決に對して眞に實踐的意義をもちうるためには、「配給の科學」とも言うべき「包括的學問體系の確立」が必要